

# 敗戦処理投手の孤独

吉田 啓

ガキの頃は天才投手と呼ばれた。本当の話だ。まあここにいる奴は誰でも、ちやほやされていい気になってた時代があるはずだ。リトルリーグの大会がある時はいつでも俺に注目が集まった。俺が振りかぶって直球を投げる。すると「パーン」とグラウンドじゅうに大きな音がひびき、キャッチャーミットからほこりがあがる。相手ベンチからの野次はピタリと止まり、大人たちは顔を見合わせ俺の方を見て驚いたように何か話している。いつだってそうだった。風は俺だけのために吹いていた。あの時の芝生の匂いを俺は今でも思い出すことができる。

ツーナッシングと追い込んだ3球目。俺が自信をもって投げ込んだストレートを打ち返した打球は高々と上がりライト、センター間をぬけて転々としている。フォアボールで出ていた一塁ランナーは2塁、3塁を回り一気にホームを駆け抜けた。

あの球を簡単に打たれるなんて。勝負を急いだのがいけなかった。ここは内角の変化球で一球外すべきだった。それに初めての一軍のマウンドで緊張していたんだ。だいたいライトが取れた打球だ。うちの

外野は足が遅すぎる。これだからいくら打っても毎年ぎりぎりのところで優勝できないんだ。

初めて女を抱いたのは16の時だった。高校野球のエースピッチャーっていうものはどこのチームでも人気がある。それが一年生のおさからだ。俺がこれからプロのスカウトの注目を浴びるようであればなおさらだ。俺が試合投げるたびにまわりに頭の悪そうなファンが群がり、まるで洋服を着替えるように女を変えていった。今考えるとあの頃が嘘のようだと思う。

ラストバッターに犠牲フライを打たれた後、シングルヒットが2本続いた。アウトカウントはひとつ。ランナーは一塁と三塁。ウェイティングサークルで4番の主砲が俺をにらんでいる。ホームランと打点でトップを走る化け物だ。ここはどうしても押さえなくてはいけない。いまバッターボックスにいる奴を打ち取れば、4番は歩かせればいい。3番の奴は当たれば怖いがここ数試合は不調だ。今日もまだヒットは出ていないはずだ。一番いい球で勝負してやる。

初球、俺は低めに力一杯ストレートを投げこんだ。キャッチャーが構えたところにずばりと決まった。しかし判定はボール。

「審判、何見てんだよ」

俺はあわててマウンドから駆け降りた。プロに入ってから7年間、これほどいいボールを投げたことは今までにない。俺の野球人生で最高の

ボールだ。青春時代の栄光と、現実の生活と、人間としての、また男としてのプライド。俺の魂の全てをこめて投げたストレートは審判の気まぐれによつて簡単に否定されてしまった。

俺は怒った。当たり前だ。俺は戦っているんだぜ。2万人という人間を一度に見たことがあるかい？ちよつとした町ができるぐらいの間だ。そいつらを集めた箱の中に俺はいる。そして今2万人は俺を見ている。信じられるか？そのなかで俺は戦っている。4万の瞳が見つめる中、たつたひとりぼっちで。

でもだれも耳を貸そうとはしなかった。一番の味方であるはずのキャッチャーでさえ、何かをいいかけてマスクをかぶりなおした。そうか、そういうことかい。

この試合は俺の前に投げた奴が見事にぶち壊してくれていた。あと2イニングしかない。残りの回で逆転は不可能だろう。もう勝負は決まっている。敵も味方も観客も、とつくにどうでもよくなっている。

でも試合は続けなければいけない。野球は9回まで行われる。プロにコールドはない。それがルールってもんだ。ファーストはランナーと何か話し、サードは下をむいている。家に帰って風呂に入って寝ることしか考えていない。試合開始の時には4万いた客も半分に減り、誰もがしらけていた。もちろん敵も。それでも9回が終わるまで、あと5つアウトをとらなくてはいけない。ルールは厳密に守られる。そ

してそのために俺がいる。

なんて下らないんだろうと思った。ルールも俺も。

2球目はミットから大きく外れ、3球目の変化球はワンバウンドになった。こんなはずじゃない。俺はコントロールはいい。それは確かだ。ストレートが全盛期より衰えた今でも、なんとかこの年になるまでプロにしがみついているのはコントロールがいいからだ。その俺が3球続けて外した。4番の巨漢が目に入る。体じゅうから汗がふきだした。たいした投球数じゃないのに肩で息をしている。

そのとき俺はたまらなく女が欲しいと思った。裸の女の肉体をむさぼりたい。そういえばしばらく女を抱いていないことに俺は気づいた。

2カ月前に4年間付き合った女とわかれて以来、女を抱いていない。結局女なんて信用できないと俺は思う。どんなに世界が平等になろうが、女には男の仕事はできない。女には死ぬ覚悟ができないからだ。

究極的などころでいつでも女は男に甘えていて、たえず逃げ道を用意している。いざとなったら自分を守ってくれる男を見つければいい。

でも男には逃げ場所はない。だから失敗したら死ぬ以外にない。野球選手は野球でしか生きられないんだ。野球を捨てた連中を何人も知っているがそんな奴らは生きてはいえない。女はどこでも生きて行くことができる。でも俺は、今俺がいる場所でしか生きられない。

そういうことだ。

4球目、外角低めを狙った直球は大きく高めに外れた。ストレートのフォアボールだ。これで満塁で4番を迎えなきやいけない。苦しくなった。

あいつは俺を愛していた。それは絶対に確かだ。たぶん今でも愛しているんだろう。このままじゃお互いがだめになるとかならないとか、脈絡のない話をだらだらと涙ながらにしゃべっていたが、要するにいつまでも一軍に上がれないことにしびれをきらしたんだ。そうに決まっている。俺がもしもエースで、スタンドでメガホンをたたいているようなやつらが、一生かかってやっと稼ぐか稼げないぐらいの金を、2年か3年でもらえるような身分だったら、あいつはいつまでも俺のそばにいたはずだ。もっとも俺があいつをおいておくかどうかかわからないがな。

愛なんてものは何もないところからは生まれえない。金が愛を生むんだ。人生金がすべてさ。金が夢を生み、金が力を生み、人間のプライドは金によって保たれる。どうせ、もともと俺は愛なんて信じちゃいない。そんなもの下らない。どうせ幻だ。だからもう、どうでもいいんだ。そんなことは。もともと俺はあいつのことを愛してなんかいなかった。本当さ。女なんてどれも一緒だと思う。

でも、もしかしたら必要としていたのかもしれない。  
たまらなく必要としていたのかもしれない。 外角へと逃げるスラ

イダーはボールの判定。今日の審判はピッチャーにとって厳しすぎる。カウントはノーツーと苦しくなった。俺は押し出しを意識した。

今までひとりでいたことなんかなかった。あいつが出て行ってからいまさらのように気づいたことだ。電気を消すと広い宇宙に投げ出されたようだ。24時間緊張し続けている。あいつがいるときには胸のところを暖かい水のようなものが存在していた。あれは一体何だったのだろう。あれがなくなってから夜がたまらなく長い。俺は一体誰なんだ、どこに行くんだと、静寂のなかで俺はよく、それまで考えたことなかったようなことを考えた。寝ているのか起きているのかわからず、うなされて初めて自分が今まで眠っていたのだと気づくこともしばしばある。まったく最低な気分になる。広い部屋のなかに誰もいない。そんな時に俺は何者なのかを教えられる。

俺はピッチャーなんだ。

俺はピッチャーなんだ。

テレビに冷蔵庫にバスルームに、ところどころあいつの気配が残っている。左腕、すなはち俺の商売道具が痛い。俺はぶざまなぐらいに孤独になって、思わずあいつの名前を呼んだ。何度も何度もあいつの名前を呼んだ。俺はあいつを必要としていたのかもしれない。たまらなくあいつを必要としていたのかもしれない。

内角にストレートが甘く入った。敵の主砲は強震すると大きな音を残し、痛烈な打球がライト線にとんだ。世界が一瞬止まる。線審を見た。両手を横に広げている。ぎりぎりのファールだ。

4球続いたファールはどれもいい当たりばかりで、ひやりとさせられる。ストレート、カーブ、スライダー、シュート。どの球種も完璧にとらえられる。カウントはツースリー。もう投げるボールは残っていない。

俺は天を仰いで深呼吸した。夜空が綺麗だった。ナイターの行われている野球場を遠くから見たことがある。暗く静まりかえった都会のなかで、そこだけがやたら明るく光り、まるで異次元の空間みたいだった。この球場も外から見たら同じように見えるはずだ。そのマウンドに俺は立っている。敵の本拠地でしかも大差のついたゲームの終盤。ここには俺の味方はひとりもない。しかし俺は立っている。逃げろわけにはいかない。

そうなんだ。俺はピッチャーなんだ。ロートルの敗戦処理投手にすぎないがな。

俺はふりかぶった。ランナーがいるが構わない。思い切りストロートを投げこんだ。俺はストレートで生きてきたんだ。だから死ぬときもストレートだ。そうだろう。ストレートが俺の人生の全てなんだ。

次の瞬間白球はバックスクリーンを遥かに越えていた。俺とあの野郎

じゃ役者が違いすぎる。最悪の満塁ホームランだ。

敵の主砲は無表情でダイヤモンドを一周した。スタンドからは大声援がわきおこる。何をそんなに騒ぐことがある。もう勝負は決まってるんだ。何点とろうが、とるまいがお前らの勝ちは動くことはない。

疲れが一気に出る。以前なら200球投げても300球投げても平気だったのに、今じゃ20球そこらでこの様だ。俺の集中力はとつくに切れていた。

プレーはすぐに再開された。売り出し中のルーキーは初球をたたき、打球は一直線にレフトスタンドにつきささった。

あいつの顔が思い浮かんだ。一軍に上がれないから俺を捨てた。その俺はいま一軍のマウンドに立っている。しかもこんなに打ちのめされている。今日はテレビ中継がある。俺のぶざまな姿は全国にさらされていくはずだ。あいつは今、俺をどんな思いで見ているんだろう。

4年間心から愛した俺の事を。

時計は9時15分を指している。こんな点差だ。中継は打ち切られたかもしれない。それに俺が一軍に上がったことも知っているとは限らない。とにかくざまあ見ろだ。

もう限界だ。俺はベンチを見た。しかし動く気配はない。俺に続投させる気だ。今日の試合、つぎ込んだピッチャーは次々とノックアウトされ、いま残っている投手はドラフト1位のルーキーと押さえの切



り札のふたりだけだ。タイトルのかかったストッパーをこんな試合で疲れさせるわけにはいかず、かといって将来のエースをつぶされるのも恐い。とにかく俺が最後まで投げなきやいけない。俺ならいくら打ちのめされても構わない。つぶれたら捨てればいいんだから。

とにかくあとアウト5つだ。かつての俺だったら、それは15球で可能だった。でももうすでに、その倍のゆうに越える投球数でワンナウトしかとれていない。一体俺はあと何百球投げればいいんだろう。そう考えると気が遠くなった。

俺のストレートはかつてのスピードはないにしても130後半はでるはずだ。それにコントロールだって悪くない。その俺がなぜ一軍では全く通用しないのだろう。

小野だったら「何か」が足りないんだというだろう。

小野は俺がまだ大阪の球団にいたとき、何かと世話をやいてくれた男だ。俺がまだ馬鹿げた夢を本気で見ていたころにはもうとつくに盛りすぎていて、彼もまたピッチャーだった。プロ生活二年間の通算成績は18勝22敗。そのうち19勝は一年間で稼いだ数字だ。小野は彼の人生の中でおそらく最も輝いていた頃の話をよく俺に聞かせた。

チームのエースとして日本シリーズのマウンドに立つ。大喚声を一身に浴び、自分の顔がアップなってブラウン管から全国に流れる。そんな中で大好きな野球ができるんだ。想像してみなよ。いい女とやるよ

りも気持ちがいいぜ。ストレートが甘く入ろうが、カーブがすっぽ抜けようが、全然打たれる気がしなかった。また実際そうだった。打たれなかったんだ。あのときの俺は俺じゃなかった。何か光のようなものが俺に乗り移って、俺じゃなくて光が野球をしていたんだ。いいか、よく聞けよ。この世界大切なのは才能なんかじゃない。そんなものは初めから存在しないんだ。あるのは思考回路さ。考えてもみなよ。一軍のトップと二軍の新人と、実力なんてほんの紙一重さ。投げるボールのスピードも、バットスイングの速さも、極端に変わるわけじゃない。それでも億の金を稼いで女優やモデルとやりまくる奴と、ベッドで時計の秒針の動く音を数えながら明日からの仕事のことを考えながらおびえている奴とは決定的に違う。それを決める「何か」がわかっているか、わかっていないかが重要なんだ。大切なのは思考回路だ。天才の思考回路を盗め。そうしたらお前も天才になれる。

日本酒を片手に同じ話を何度も熱っぽく語る彼を、いつも俺はなかば軽蔑しながら見ていた。たまたままぐれが続いただけさ。それ以外の年はトータルで〆勝しかしていない。俺はいつまでも過去にすがっている彼を醜いと思った。結局は敗北者じゃないか。

でも今は違う。本当の敗北者は俺の方だ。

小野さん。俺はあんたがうらやましい。例え短くても、輝くことのできる瞬間があんたにはあったんだから。

次のバッターはワンエンドワンからの3球目をつまらせて、打球はセカンド後方にふらふらとあがった。俺はほっとして振り返ったが、どこまで運がないんだろう。白球はライト前にぽとりと落ちた。

小野は俺がトレードに出された年の暮れに自由契約になった。その後の消息は知らない。俺は彼に会いたいと思った。頼むから教えてくれよ。あんたの言う「何か」って、思考回路ってなんなんだ。俺には一体何が足りないっていうんだ。結局彼はそのことを教えてくれないまま球界から姿を消した。もう二度と会うこともないだろう。もしもこの世に才能というものが存在するとする。そうしたら俺にだって確実に野球の才能がある。だから今ここにいるんだ。

カーブが外角ぎりぎりに決まった。ストライクワン。

でも俺の才能は世界を圧倒するような強力なものじゃなかった。それが俺の悲劇だ。才能は最大なものに限る。でなければ全くない方がいい。一番の不幸は自分を過大に評価しすぎることだ。人間は若いうちにこてんぱんに打ちのめされるほうがいい。俺のようにいきがった馬鹿はとくに。

3球目はスライダーを打ち上げ一塁側スタンドに入った。ツーナッシング。

生まれてから負けたことなんてなかった。

俺は甲子園に出たことはない。期待されていたが、いつもあと一步の

ところで敗れた。でも俺が打たれたわけじゃない。エラーで負けたんだ。本当だぜ。

あの日のことはよく覚えている。0対0で迎えた9回表。セカンドの奴がゴロをはじめやがった。練習でさえ一回もしくったことのないよなイージーゴロを。あれが結局決勝点になって俺は甲子園にいけなかった。負けた気なんて全然しなかった。だってそうだろう。打たれなかったんだから。エラーした奴はいつまでも大きな声で泣いていた。馬鹿じゃないかと思いつつ俺はそいつをみていた。二十歳近い男が人前で泣くなんて。

俺は泣いたことがない。恋人と別れたときも、親友が死んだ時でさえも。どんなに悲しいときでも涙がでないんだ。みつともないじゃないか。男が泣くなんて。でももしも、俺に泣くことができるんだったら、もう少し楽に生きられたのかもしれないがな。

プロに入ってから、いいときも悪いときもあつたけれど、敗北感なんて一度も感じたことなんてなかった。もちろん打たれたことはあつたけれども、今夜ほどひどいピッチングはしなかった。心のどこかで信じていたんだ。俺は本当は天才なんだって。今でも信じているのかもしれないがな。

若いうちにさっさと敗北したほうがいい。自分が雑魚だと認識して雑魚なりの生活を送る。若ければ雑魚のする仕事はいくらでも見つかる。

るはずだ。

雑魚は死ぬまで雑魚だけれども、それでも幸せになれないわけじゃない。でもこの年になって初めての敗北なんて、一体明日から何をすればいい？きついぜ、まったたく。

でも本当は違うかもな。俺は負け続けていた。ただそれに気づかなかったんだ。要するに俺は馬鹿だった。ここに来てようやくわかったんだ。でもどうせだったら死ぬまで馬鹿でいたかった。夢から醒めたあとはいつでも憂鬱だ。

3球目、ストレートにバットは空を切った。三振だ。俺も捨てたもんじゃないな。伸びた球を投げられるじゃないか。いや。やめておこう。たかがアウトひとつじゃないか。ここにたどりつくまでに何点とられてるというんだ。現実を考えな。現実を。

現実はずぐに現れた。次のバッターは初球をたたき、打球は右中間をまっぴたつに割った。ライト、センター間の一番深いところを俺の現実が転がって行く。一塁ランナーは一気にホームインした。ウェイテイングサークルの男と手をあわせる。22という背番号が見えた。

15年前まではその背番号は木下という奴がつけていた。レギュラーじゃなかったけれども、代打の切り札でチャンスになると起用され、いいところでよく打ったから人気があった。よく知ってるだろう。二年前の優勝の時のオーダーは今でもそらで言える。高岡、大石、デー

ビス、大河原……。エースは野口と左の松本。小島っていうのもいたよな。ノーコンだけど球はめっちゃめっちゃ速かった。……ファンだったんだ。ガキの頃から。お前らのブルーのユニフォームを着てマウンドに登るのが俺の夢だった。そのユニフォームを着たかったから俺はプロを目指したんだ。そのブルーのユニフォームに打ちのめされるなんて。だまされたぜ。全く。

監督がベンチから出て来た。ようやく交替だ。正直言ってほっとした。早く帰って眠りたい。風呂にも入らずいきなり横になりたい。

俺のけつを吹くのはドラフト一位の新人だ。彼は慥然とした表情でマウンドにあがり、何も言わず俺からボールをうけとった。近くでみるとなかなかいい顔している。今まで何人も女を泣かしてきているんだろう。身長は俺とそれほど変わらないのに、随分大きく見えた。こいつには俺がもってない「何か」ってやつが備わっているのかもしれない。俺は静かにマウンドを降りた。

ベンチでは誰も俺に声をかけようとしなかった。ベンチでの雰囲気はたえられず俺はロッカーに出ていった。椅子に腰掛け煙草に火をつける。あつと言う間の出来事だった。不思議な時間だった。何があったんだろう。なにも感じない。悔しいとさえも思わない。

今度こそ。

今度こそと俺は思った。今日は調子が悪すぎた。次はきちんと投球を

組み立てて、一球一球慎重にいこう。そうすればきっと押さえられるはずだ。今日は緊張しすぎていたんだ。仕方ない。次はきつといい仕事をやるさ。

でも今度って一体いつのことだろう。そう考えると俺は不安になった。突然グラウンドから大喚声が聞こえてきた。なにが起こったのかはわからない。俺とは全く関係のない世界の出来事のように思われた。